

2

お姉ちゃんは辛抱強い

姉・悠実。一九七八年（昭和五十二年）生まれ。



夏がいちばん

夏が来た。

夏は好きな季節だ。

がんがん陽が照って嬉しい。

タイサンボク、カンナ、ヒマワリ、

あおい、ダリア、グラジオラス、

大きな花が、ワイワイ咲きそろろう。

元気いっぱいになる。



中耳炎

悠実は保育園に入園するとすぐに風邪をひいて、高熱を出した。それまでは家にいたので、風邪はクシヤミ程度で治っていた。

子どもは、時々病気をして免疫をつくっておくことが大切だと、あとで思った。

風邪が治ってしばらくすると、うしろから声をかけても返事をしない。耳が聞こえないのだ。私は真っ青になった。

D病院の耳鼻科に行くと、待合室で二時間ぐらい待たされた。近所のお母さんも子どもを連れて来ていた。そのお母さんに話しかけられた。保育園の先生のことや、友だちの子どものこと、自分の子どものことなど。

待合室は、ごったがえしていた。泣く子、鼻水をたらす子、セキをする

子、なぐりあいの喧嘩けんかをする子。

医者も忙しく、イラ立っていた。質問もできないほど不機嫌だった。診察は、三分で済んだ。急性中耳炎と診断された。治療をもらった。

耳はすぐに聞こえるようになった。

中耳炎がどんな病気か、まったく知識がなかった。

わからない病気のこととは、わかるまで医師に説明を求めべきだと、あとで思った。

何よりも、初めて行った耳鼻科の待合室に、うんざりした。

この日、一回耳鼻科に行っただけで、治療をやめてしまった。

夫が「医者がいいと言うまで通うんだよ。素人判断は禁物」と言っていたにもかかわらず。

完治しないと、繰り返し、中耳炎は起こるものだった。そのたびに、D病院で、鼓膜切開をすることになった。鼓膜切開は、中耳炎の古い治療方

法だということがあとでわかった。今では、抗生物質で治療する。鼓膜切開は、ほとんどしない。

鼓膜切開をしたのに、そのまま保育園に送って行った。入園したばかりだったので、休ませたくなかった。病気の時は、ゆっくり休ませるべきだったと、あとで思った。

頻繁に鼓膜切開をしているうちに、悠実の耳はまったく聞こえなくなっ
てしまった。顔色は薬のため白く、ぼんやりしていて、元気がなかった。
薬は、ピンク色に着色された粉薬だった。六時間おきに飲むように言われ
た。変な時間から飲みはじめたので、真夜中に起きて飲まなければならな
かった。睡眠時間がなく、ますます、ぼんやりして元気がなかった。

電車でシルバーシートの男の人が「かわりましょう」と席を譲ってくれ
たこともあった。ああ、誰からも障害児に見えるのだなと思った。

耳がこのままダメになったらどうしよう。

朝早く夫に予約を取ってもらい、ほとんど毎日のように耳鼻科に通った。同じ年齢の子どもたちが元気に太陽の下で遊び回っていた時、悠実は、耳鼻科の待合室で、本を読んでいた。耳鼻科に来ている子どもたちは、はつらつとした顔がなかった。

保育園では、走るといつもビリだった。薬を飲んでいて食欲がない。睡眠不足。立っているのがやっとなのに、走れるわけではない。

保育園では、速く走れる子と遅い子に分けて、速く走れる子のグループに、遅い子を入れて、グループで競わせた。

悠実のグループは、いつもビリだった。

耳が聞こえない悠実には、「よいい、どん」も聞こえない。みんながスタートしてから走り始める。これでは、速いわけではない。

子どもの世界は、きびしい。悠実をあからさまに罵った。

「ばか!」「まぬけ!」「のろま!」「もつと速く走れないのかよ!」

保育園の先生は、いらだっていた。自分の指導の成果が上がらないからだ。若い保母には、人生は、自分のペースで歩めばいいのだということがわかっていなかった。若くて経験不足だった。

私は、自分の都合で、保育園に入園させたことを後悔した。探し回って見つけた保育園だった。

リトミック（リズムに合わせて体を動かす指導）を保育の柱にしていると聞いた保育園だったが、リトミックを指導できる先生はいなかった。ピアノに合わせて、子どもたちが、どたばた、ぐるぐる走り回るだけの時間が、延々と続いた。リトミックの指導は、先生に力がないと続かない。だから、どこの保育園や幼稚園でも、やっていなかったのだ。

中耳炎は慢性化し、とうとう滲出性中耳炎に進行した。急性中耳炎を、

すっかり治さなかったことを後悔し続けたが、あとの祭りだった。一回目から、気長に治療する心構えが必要だった。

アレルギー性鼻炎や、アデノイドが大きいなども原因であることが、あとでわかった。悠実はこの症状も、持ち合わせていたのだった。

保育園から幼稚園に転園した。悠実は、また、ビリだった。みんなは走り終わって並んでいるのに、悠実だけがまだ走っている。

お母さんたちが、口々に

「悠実ちゃん、しっかり！がんばって！」

と、手をたたいて、応援してくれた。その応援も、悠実には聞こえていなかった。

この時の聴力は、正常の子のずっと下、はるか下だった。まったく聞こえていなかった。そのことを、幼稚園の友だちも、その母親も、知らなかった。

悠実を抱きしめて泣いた。

もうすぐ、小学校に入学するという時、夫は、

「今は性能のいい補聴器もあるし、特殊学級もある」と、のんきに言った。

小学校は、普通学級の一年生に入学した。

外見は普通の子どもだったが、聴力はほとんどなかった。難聴のことをお願いしたはずの頼りにしていた担任の先生は、出産のため、十二月で退職してしまい、一月から代わりの先生が来た。

悠実の耳のことは、引き継ぎがされていなかったことが、あとでわかった。

ペーパーテストはできても、口頭でのテストはできなかった。山や川という簡単な漢字も、2 + 3のような簡単な計算も、口頭で出されれば、当

然、聞こえないのでできなかった。

小学校の二年生の夏休み。

朝、D病院の順番を取りに行つて驚いた。一三六番だった。午前中の診察は、それ以上の人数だ。

別のE病院に行くことにした。

この時は、熱も、痛みも、耳だれもなかった。

「中耳に、滲出液がたまつて、聴力が落ちています。滲出液を排除する手術をします。よろしいですか？」

「はい。お願いします」

滲出液を排除する手術は、すぐ開始された。

診察台の悠実を、両側から看護婦さんが押さえつけた。足を私が押さえた。「鼓膜に穴を開けて出します。ちよつとでも動いたら、二度と聞こえなくなつてしまいます。しっかり押さえつけてください」

「はー」

大きな注射器で、ウミを、吸い出した。シャーレにいっぱいのはそれは、ゼリーのようだった。

悠実は、我慢強かった。

とたんに悠実の耳は聞こえるようになった。

若い耳鼻科の先生に感謝した。

急にスポーツも、勉強も、元気いっぱいできるようになった。

中学生になると、クラス対抗リレーの第一走者や、アンカーになった。

勉強も、どんどん伸びていった。

そのころには、だれも、聴力がなかった時期があつたことなど忘れてしまつた。

私は、時々、また聞こえていないのではないかと心配になる。

(一九八七年四月記)



福 耳

「耳にしもやけができて、かゆいよ。中耳炎に何回もなつて聞こえなくなつちやつたし、悠実の耳は大きいばかりで、なんの役にも立たないよ」

毎日通院した耳鼻科の先生も、

「大きな耳だね、こりやすうごい」と言った。

悠実が四歳の時、郵便局で、白髪・白髭、杖をついたおじいさんがやって来て、

「大きな、いい耳をしている子だ。この子は、立派な人になりますよ。お金もたくさんたまるでしょう」

と言った。

それは、まるで、トルストイの小説から抜け出て来たような老人だった。

磨実が生まれて三カ月経った。磨実の耳は小さく、ペタンとまるまってる。急に心配になった。すぐ病院に行った。

「耳の形がおかしいので診てください」

「正常の範囲です」

と、先生は、笑って答えた。

磨実が普通で、悠実が『福耳』といわれる耳だった。

ディズニーの映画『ダンボ』のラストを思い出した。

「ダンボ、自分の力で飛んでごらん。おまえは、おまえの力で自由にどこにでも飛んで行けるんだよ」

「お母さん、ボク自分の力でやってみるよ」

悠実も、磨実も、自分の力で、はばたいてほしいと思う。

(一九八七年二月記)



なわ跳び

悠実が幼稚園の時のこと。

友だちと二人でなわ跳びの練習をした。一つパタンと跳ぶと、後ろで手が止まってしまう。なわをぐるぐる回せない。それで、二人で私に教えてくれと頼んできた。

「先生が『家で練習してくるように。できなければ、お母さんに教えてもらうように』って」

運動会になわ跳びを五回跳ぶ障害物競争がある。跳べないのは悠実とその友だちだけなのだ。あと三日で運動会だ。

なわ跳びには、コツがある。先生は教育のプロなのだから、そのコツを知っているはずだ。

園児を早く帰宅させての先生方の研修会も行なわれている。子どもが園にいる間に指導できないのだろうか。なぜコツを知らない母親が教えることになってしまうのだろうか。悠実の友だちは母親がいなくて、おばさんの家にあずけられている。指導する母親がないのだ。

とにかく、運動会が近い。私は、我流の教え方と根性路線でいくしかないかった。

右手だけでなわを持つ。なわを回し、それに合わせてピョンピョン跳ぶ。左手だけでも練習する。跳び上がるタイミングや回す速さ、高さがポイント。

トになる。私が注意する。

「もう一度同じ位置で」「もっとゆっくり回して」「足を揃えて」

一日目で手がグルグル回るようになり、一、二回跳べるようになった。

二日目には三、四回続けて跳べた。三日目には五、七回続けて跳べるようになった。

二人は、ゼエゼエ息を切らし、汗びっしょりになって頑張った。

「五回続けて跳べたから、明日の運動会はだいじょうぶだね。よかったわね」

「おばさん、見に来るの？」

「仕事があるからね。考え中よ」

私が運動会に行つて、悠実を応援するのを、母親のいないこの子はどのような気持ちで見るだろうか。私は行かなかった。

やっと跳べた子が速いわけがなく、二人ともそろってビリだった。運動

会が終わって、その友だちが遊びに来て言った。

「ユミちゃんちはオジイチャンとオバアチャン、マミちゃん、オトウサンが来てた。ウチはオバサンとオバサンのオネエサン、オトウサンが来てくれた。他のみんなのうちはおカアサンだけだから、ウチとユミちゃんちが来た人数で勝ってたね」

毎週遊びに来ていた彼女は、小学校一年の秋に転校して行ってしまった。

悠実は今「駆け足跳び百回」の練習をしている。

あの子も「駆け足跳び百回」をやっているだろうか。

(一九八七年一月記)



十文字言葉

「鼻紙で鼻をかみなさい」
と磨実に言うのと、

「それ、十文字なんだよね」
と悠実が言う。

小学一年生の授業で、「ことば数」が出てくる。たとえば有名なものは、『だるまさんがころんだ』。他にも『こんにちは さようなら』『おかのうえ しろいくも』『しろいはな あかいはな』の例がある。

十文字の遊び言葉を、悠実が作った。

「お母さん、できたできた。笑わないで」

そのノートには『はながみで はなをかむ』と、書いてあった。

「すごい、すごい。素晴らしい」と、言いながら腹を抱えて笑った。

悠実も、畳にひっくり返って笑った。

それからは、次々にできた。

『よるは でんきをつける』『えんぴつけずりを かう』『おおいしょうがつこう』『かきかたの れんしゅう』『クレエプは おいしいよ』『ぞうはどうぶつえんだ』『ペンギンは いないんだ』『さるが かきをたべてる』『くもは いますをつくる』『ばんそうこうを はるよ』『ほんを たてて いるんだ』『たまごやきを たべるよ』

『鼻紙で鼻をかむ』を最初に考えつくというのも、耳鼻科に通院した自分の経験からきたのだろう。

指を折りながら、この言葉を唱えると、自然に笑えて元気が出てきた。

(一九八七年五月記)



文字の書き方

悠実には『エンピツの持ち方』や『正しい姿勢』を教えないまま、字を教えてしまった。早く書く練習をさせたので、なぐり書きをする。一度身についたものは、なかなか直すことができなくなってしまった。私は、とても後悔した。

悠実は学校が大好きで、元気に通学しているのだから、それでいいことにしよう。字は読めればいいことにしよう。

もうすぐ、ワープロ、コンピューター、インターネット、電子図書の時代が来る。

悠実は、ピアニストの館野泉さんから手紙を二通もらっているが、館野さんの字はお世辞にもうまいとは言えない。しかし、心のこもった、うれ

しい手紙だ。

(一九八七年八月記)



お誕生会

悠実が初めて、お友だちのお誕生会に呼ばれた。まだ先のことなのに、プレゼントは何にしようか、どのスカートをはいて行こうかなど、考えるのが楽しいようだ。

自分の誕生会の時の招待状を画用紙で作った。『ぜったいに来てね』と書いた。カードはどんどんふえて、クラスのほとんどの子になった。

「呼ばない子は、なぜ呼ばないの？ 悠実が呼ばれない子の方だったら、どうかな。悲しいよ、きつと」

全員呼びたいけど、大変だし、呼ばない子は、あまり話をしたことがない子だよ」

「呼ぶのは十人ぐらいにしたら。プレゼントを買う方も大変だし」

「それもそうだね。でも、だれを呼んで、だれを呼ばないか。困ったな。呼ばないと、かわいそうだし」

他の家では、いったいどうやって、呼ぶ子と呼ばない子を決めているのだろうか。

初めてのお誕生会の日。

悠実はお年玉で、三千五百円のぬいぐるみのウサギを買った。白いワンピースを着て、ネックレスをつけて、黒いエナメルの靴をはき、頭に、ピンクのリボンをつけて出かけた。絵本に出てくるバースデーパーティーを考えていたのだ。絵本の中では、ケーキにロシアンティーが出て、ハッピーバースデーの歌を歌うことになっていた。

ところが、現実の食べ物はスパゲッティに、マカロニサラダ。コココー

ラが出た。遊んだのは『おいかけ鬼』。これは悠実のきれいなものばかりだった。

帰宅した悠実は、

「お誕生会はずまらなかつた。ボクの時は、やらなくていいよ」と言った。

友だちの誕生会に行くのに一番困るのは、プレゼントを何にするかだ。悠実も、そのたびにデパートに行く。バッグやエンピツケース、ピノキオのあやつり人形、ぬいぐるみ、ミッキーの壁掛け、オルゴールなど。

玩具屋に行くと、プレゼントを買いに来ている親子に出会う。

「何にするの？ 早くしなさい！ そんな物、あの子が欲しいと言ってたの？ 自分が欲しいのじゃだめだよ。それは、高すぎる！ もっと安いのないの？」

イライラしたお母さんの声が聞こえる。実際、千円ぐらいでは、思うような物を買えない。

ある時、ピアノ教室に来た生徒が、思いがけないことを言った。

「昨日は私の誕生日で、みんなを呼んだの」

「よかったね。プレゼントたくさんもらえたでしょう」

「でも、お母さんに取りられちゃって、つまんなかった」

「あなたがもらったのに、なぜかな？」

「次に、だれかから誕生会に呼ばれたら、それを別の紙に包んで持って行くの」

そんなことがあるのだろうか？

私は、招く方をやったことがないけれど、家中の掃除やら食事の支度、お返しを買ったりと、いろいろ、大変だろうと思う。

悠実のように、行ってもつまらなかつたという場合や、氷入りのジュースにポテトチップスを食べておなかをこわしたりした場合は、せっかくの

パーティーに悪い印象が残ってしまう。

それほど、親子で力を入れてやっていたお誕生会も、四年生以上になると、やらなくなってしまう。

三歳の子よりも、十歳の子のほうが、事故死も病死もせず長く生きられたのだから、みんなで祝うべきなのに、お誕生会なんて子どももつばいとか、勉強が忙しくて、それどころではないなどの理由で、やらなくなってしまう。

ウチでは、家族だけで誕生会を開く。

ケーキの上のローソクに火をつけて、ハッピーバースデーの歌を歌う。

口々に、おめでどうを言って、おばあちゃんが作ったお寿司を食べる。

私が、死んでいった最初の子の話をし、それぞれの出産の時のことや、小さかった時の話をする。そして、悠実も磨実も、今頑張っていることや

これから何がしたいかなどの夢を話す。トランプをしたり、歌を歌ったり。このささやかな幸福が、ずっと続くようにと願う。

「今の時代に生きていてよかったと思う？」
と悠実が聞く。

「もちろん。今がいいさ」

と麿実が答える。

「ここんちに生まれて来てよかったと思う？」

「ウン。ほかの家は、しつげがきびしそうだもの。ここの家でよかったと、ボクは思うよ」

「ボクもだよ」

テレビで、映画評論家・淀川長治氏について、作詞家・永六輔さんが語っていた。

「僕と淀川さんとは、誕生日が同じです。ある年の誕生日に、一緒に食事

でもしませんかと声をかけると、『一年のうちで、この日だけは、もう決まっているんです。家で、母と一緒に食事をし、話をするのです。すみません』と、言われた。僕は思いました。なんてあたたかな人なんだ。なんて素晴らしい誕生日の迎えかたなのだろう。自分を生んでくれたお母さんに感謝する日だと言うのですね。お母さんと過ごす静かな誕生日。淀川さんらしいですね。僕は、まだまだ、淀川学校から、卒業できません』と。生まれて来てよかった。今が幸福。未来に夢がいっぱい。そんなことの語り合える誕生会にしたい。

(一九八七年六月記)



宿題

悠実が小学校一年の時、すごい宿題が出た。

ある日、担任の先生が欠席された。他の先生が来られて「くじらぐも」のところを写すように」と言われた。『くじらぐも』は、十ページもある。

国語の時間中、ノートに写したが、ほんの少ししか進まなかった。

字を習ったばかりだったので、写すだけでも大変だった。行をぬかしたり、同じ所を二度書いたり、すぐにあきてしまった。時間内に書き終わらなかった所が宿題となった。

これは一年生になって、初めての宿題であった。

悠実は当時、中耳炎が一番悪い時で、薬でパワーがどんどんなくなっていった。病院から帰って、五時から夕食前まで写したが、終わらなかった。

食後十時までやったが、まだ終わらなかった。

あと一ページというところだったので、翌朝五時に起きて写した。朝食直前までかかって、ようやく終わった。

食事は立ったままで、ちよつとつまんで食べただけで、学校に行った。ともかく宿題を終わらせたので、私も悠実もほつとした。

「ただいま、お母さん。写す宿題を出した先生は、もう今日は来なくて、担任の先生が来たから、ノートは提出じゃなかったし、見なかったよ」

私は言葉がなかった。

担任の先生は時々休み、十二月で出産のため退職された。

(一九八七年十月記)



ドッジボール

「お母さん、もう、やんなっちゃうよ。毎日ドッジボールの試合で、今日も負けて、まだ、一勝もしていないんだ。ボクが、そのチームのリーダーなんだ」

と悠実が言う。

悠実は、毎日五時ごろまで練習をして帰って来る。真っ黒に日焼けをして元氣いっぱいなので、私は、気にしていなかった。

しばらくして、こんなことも言った。

「ボールがだんだん取れるようになったけど、顔に当たるのは、やっぱりいやだよ。男子で、すごくきつい球をなげられる子がいて、その子がいるチームは、いつも勝っていて、たまに負けると、その子がすごく悔しがっ

てね、朝、みんなを集めて、練習しているんだよ」

悠実は、ボール遊びをしないから、ボールになれていない。だから、怖がつてしまうのだろう。そのチームで話し合ったという。明日の練習予定と試合の心得。

①足を狙う。②強い球は、取らない。③取ったら、すぐになげる。④声を出す。⑤最後の一人になっても、逃げてがんばる。

悠実がリーダーで、一勝もできないで悩んでいることを夫に話すと、意外なことを言った。

「ドッジボールは、チームゲームだ。悠実だけが弱いんじゃないよ、他の子も弱いんだよ。たとえば、悠実が当たって、すぐ外野に出てしまう。その後、悠実にボールを送らずに、チーム全員で頑張れば、勝てるわけでしょう。それでもだめなのだから、悠実と同じぐらいに弱い子が、ぞろりと、メンバーに勢揃いしてしまったのだろう。悠実一人の責任じゃないさ」

私は、肩の荷がすっかり下り、口出しをしないで、悠実にまかせて、見

守っていることにした。

後日、担任の先生も心配して、年賀状に「ドッジボールのリーダー、がんばっていますね」と書いてくださった。

悠実たちのチームの名前は『スーパードラゴンズ』で、とても強そうだ。

「磨実も、小学三年生になった時、ドッジボールの勝ち抜き戦があった。

磨実のグループは、悠実の時を上回るほど連敗した。

磨実が、学校から帰ってしょんぼりしていても、ぐずぐずほやいても、私は、今度はまったく心配しなかった。

「あのメンバーじゃ、勝ち目がないねえ」

と悠実が批評した。

そのグループの名前は『ポコタン』だった。

「がんばれ、がんばれポコタン！」

「フレ、フレ、ポコタン！」

「ファイトー！ ポコタン！」

応援しようにも、なんとも間抜けな名前のチームで、これでは、力が入らない。

「ポコタンって、だれがつけたの？」

「だれだかわからないよ。ポコンと当たって、タンとコケルんだってさ」

これは名前がよくない。

チームみんなで相談して、『ウルトラドラゴンズ』にした。今度は強そ
うだ。

名前を変えたとたん、このチームは連勝して、なんと優勝チームになっ
てしまった。

一番びっくりしたのは、担任の先生だった。

（一九八七年十一月記）



ひとりで乗り換え

NHKテレビ七時のニュースを見ていてびっくりした。

「JR東海の上り電車が早川駅で止まらずに、小田原駅まで走ってしまつた。早川駅で降りる予定だった人は三名。乗る予定だった人は十五名」と言っていた。

この珍しい出来事に遭遇した人々は、面白かつただろう。運転手さんは何を考えていたのだろうか。

悠実が十歳の時、ピアノのレッスンで真鶴町まで電車で通わせていた。

当時は気がつかなかつたが、五年ぐらいして仰天し、寒くなった。まず、小田急線の新松田駅から真鶴駅までのキップは買うことができるけれど、

問題は帰りだ。真鶴駅からは、いったん小田原駅まで買って、小田原駅の精算所で、今度は新松田駅までのキップを買う。それは教えていなかった。日曜日には小田原で競輪があり、精算所はごったがえす。十歳の女の子が、そのおじさんに混じってキップを買っていたというのか。

次に、J R 東海の小田原駅には急行電車が止まる。真鶴駅には急行は止まらない。急行に乗ってはいけないことを教えていなかった。その上、強風が吹くと、早川鉄橋が閉鎖され電車は運休となり、乗客は海岸道路をバス輸送となる。それも知らなかった。

しかし、悠実は何事もなく、毎週ピアノのレッスンに通った。

(一九九九年記)



自
慢

悠実が成人した。

「娘が、二十歳になったんですよ。虫歯が一本もないんですよ」と言っても、だれも驚かない。

これは、とてもすごいことなのに。

(一九九九年一月十五日記)

3

妹は好奇心のかたまり

磨実、一九八〇年（昭和五十五年）生まれ。



花を買う

黄色のおだまきを買っている

奥さんがいた。

私は水色のテッセンを買った。

「いいですねえ」

と、知らない奥さんと言葉を交わした。

浮き浮きした気分になった。



肉 食

「お母さん、これなんの肉？」

「ブタ肉だよ」

「エエッ！ ブタって、あのブタの肉？ これが？ ウソ！」

「本当よ。肉にはブタ肉、牛肉、馬肉、魚肉といろいろあるでしょ。みんな殺して皮をはいで、骨を取って」

「……」

磨実を見ると目が真っ赤だ。泣いている。

「ブタは食べられるためだけに生きていてかわいそうだね。馬は競馬に出られるのもいる。牛はミルク用の牛がいるから少しはいいけど。魚だって人間に食べられるために生きていてかわいそうだよ。ボクは今日からもう

肉は食べない」

「そんなことを言うのなら、マミちゃんの好きな玉子焼きも、できなくなるじゃないか。玉子だってヒヨコになってニワトリになるはずのものなんだから」

「じゃあ、玉子焼きも、もう食べない。みんなかわいいそうだもの」

「それならニンジンだって、キュウリだってかわいいそうじゃないか？ 食べる物がなくなつて、マミちゃんだけ死んじゃうよ」

「うん、それもそうだね。死んじゃうのはやだね。でも、あまりブタなんかは食べないようにする」

磨実は時々思い出したように、

「ブタってかわいいそうだね」

「魚ってやだね。ボクは魚じゃなくてよかった」

と言う。

実際には玉子の料理が大好きだ。

『吉野家』の牛どんは大人と同じ量を、おいしいとたいらげてしまう。スキヤキも刺身もよく食べる。

(一九八七年一月記)



交通安全指導

幼稚園で親子の交通安全教室があった。

おばあちゃん、つまり私の母が行ってくれた。

「交通安全指導員の人と話されたのだけれど、丁寧で上手だったよ。手をつなぐ時は手首を持つたとか、雨の日の傘のさし方だとか。いや、勉強になった」

と、おばあちゃん。

「みんな、お母さんが来ていたのに、ボクだけ、おばあちゃんだった」と、磨実が言う。

幼稚園にあがる年になれば、子どもは親と手をつないでは歩かない。自立の心が芽生えてきて、一人で歩きたがる。

もうすぐ磨実は、小学校一年生だ。一人で外出し、車からも身を守らなければならぬ。自分のこととして聞いただろうか。

その時の交通安全指導なのだから、親の参加は余分というものではないだろうか。

(一九八七年一月記)



ババロア

幼稚園でババロア作りがあった。卒園記念行事のひとつである。磨実
はババロアが食べられるというのではりきった。

帰って来て、自分でやってみると言い出した。

「ピアノ教室が終わるまで、少し待っていてね」

と言ったのに、しばらくして台所に行くと、もうグチャグチャ。

ミルクがこぼれている、ゼラチンの粉が飛び散り、玉子のからが散乱
している。

足の踏み場もない。できあがったババロアが六個、テーブルに並んで
いる。

磨実が指を入れては、

「まだ固まっていけないけど、いいお味」

と言ってなめている。

「玉子は一人に一個使ったよ」

「玉子を六個も！」

夕食後、いよいよ食べることになった。

「マミちゃん、いただきます」

「へえ、マミちゃんだけで作ったの」

「おいしいよ。かたさもちょうどいいし、あんまり甘くない」

磨実はてれ笑いをしていた。

それから連日、園から帰るとババロア作りをした。

三日目と四日目には幼稚園の先生方にも持って行った。先生方が食べた感想を書いてくださった。かわいいクマや、花柄の手紙。飛び出すウサギのカード。よい思い出が残った。

二週間近く、磨実はババロアを作り続けた。

ババロア作りを教えてくださいました先生に、そして意欲に応じて丁寧な返事をくださった先生方に感謝している。台所はこの間、ぐちゃぐちゃになったけれども。

(一九八七年二月記)



観劇

磨実の卒園の二週間前になって、幼稚園で、謝恩会の練習があった。連日、緊急網で電話連絡があった。平日なのに毎日のように、母親が園や、公民館に集まった。

園で、木馬座のマスク・プレイ・ミュージカル『ねむり姫』と『マッチ売りの少女』のチケットを売った。

「チケットを買ったのは、ボクだけだった」と、磨実が言った。

あれほど、「子どものため」「先生のため」「園のため」と、集合し、頑張った親が、だれもチケットを買わなかった。なぜだろう？

コンサートや劇を見るのは、心があたたまり、親も子も楽しい。ペロロの作品にかぎらず、物語には、怖くて恐ろしくて残酷なものが多い。これが人間の本質なのだから、逃げないで子どもたちに伝えていきたい。

この日、コンサートの帰り、星空の下を歩きながら、娘たちが言った。「魔女が、ボクたちの方を、ぎよろつとにらんで怖かったねエ。あのメガネは、色セロハンで出来てたんだよ」

「お母さん、とっても いい気持ちだね。また行きたいね」と。

(一九八七年三月記)



入学式

磨実の入学式に出席した。

悠実の時はお父さんが行ったので、当然のように私が行くことになった。学校行事には、初めての参加だ。近所のお母さんも「ためになるから行ったら」と、すすめてくださる。私は入学式のことを考えると胃が痛くなり、睡眠不足で寝込んでしまった。

入学式の朝、磨実が泣いた。

「登校班と一緒に行くよ」

「新一年生は入学式の時間までに行けばいいのだから、まだゆっくりしていなさい」

「一人で行けるヨ。お母さんが来なくても学校に行けるヨ」

「いつも学校のグラウンドで遊んでいるのだから、行けないわけがないけれど、今日は、お母さんも行かないと、いけないんだよ」

困り果てていると、夫が、

「一人で行かせてみたら。入学式で、親がやることは何もないのだし。磨実だけでも大丈夫だよ。ねえ、磨実」
などと、のんきなことを言う。

学校に行くと、私たちが一番最初だった。

「どこで待っていたらいいでしょうか？」

と通りすがりの女の先生に尋ねると、

「あっちに行つててください」

名前の出ているロッカーの前に行くと、知っているお母さんに次々話しかけられた。

「おたくは、みなさん先生だから」

「あら、ウチの子と同じクラスね」

時計を何度見ても、時間がなかなか進んでくれない。気がつくとも、磨実
はハガキを受付に出して、一組の教室に入り、自分の席に座っていた。

入学式が始まった。

教頭の挨拶。校長の挨拶。町会議長の挨拶。PTA会長の挨拶。国旗に
最敬礼して長々と祝辞をのべる。

今度の人こそと思って聞いていたのに、ついに『ためになる話』は、聞
けなかった。新一年生はあきてしまい、足をバタバタさせたり、隣と喧嘩
をしている子もいた。

いったい入学式は、だれのための行事なのだろうか。担任紹介と、二年
生の歓迎レセプションだけでいいと思った。

式の後、磨実は学校で遊んで帰ると言うので、私だけが先に帰った。も
う十二時を回っていた。親の出る幕は何もなかった。

私は気疲れから寝込んでしまった。

(一九八七年四月七日記)



逆上がり

「幼稚園で、逆上がりができないのはボクだけなんだ。いくらやってもできなくて、カードが逆上がりのところで止まって、ぜんぜん進まないの。みんなはいいな」

曆実は、幼稚園に一年間だけ行った。その間ずっと言い続けた。

「鉄棒は、園に行った時に、先生と曆実でやればいい。できなくてはずかしいのなら、自分で頑張ればいい」

ところが、一年後の三月になっても、

「まだ、できないよ。先生は、もう少しと言っているけれどできないよ」と言う。

私は、あせった。小学校に入学して一人ずつ逆上がりをやらされ、磨実だけでできないでいるとしたら。ああ！ どうしよう。

「三月から、磨実ちゃんと一緒に、ボクも体操クラブに行くよ。逆上がりを教えてもらうよ」

と言いだした。

これは、学校で算数がわからないから、学校から帰ったら塾の先生に教えてもらいに行くのに似ている。

体操クラブの先生は、

「十秒懸垂ができれば、逆上がりはできます。磨実ちゃんは、体がやわらかいから、すぐにできますよ。でも鉄棒は後期の種目なので、秋にならないとやりません。だいじょうぶですよ」

と言われた。

「できないものがあるということは、いいことなんだよ」と夫は、のんきなことを言った。

春休みに、おじいちゃん（私の父）が鉄棒を作ってくれた。小学校に測定に行つて、小学校の鉄棒と同じ高さにした。

磨実にやらせてみると、前半の、土を蹴つて棒にからまるところができない。両足が伸びて、すぐバツタリ地面についてしまうのだ。棒にからまるフォームができないのだ。

磨実は、毎日がんばって何度も挑戦した。そのたびに足が上がっていかなくて、バツタリ地面にもどつてしまい、だめだった。悠実がやって見せても、足を持ってあげてもだめだった。

おじいちゃんも、おばあちゃんも、隣のおばさんまで出て来て

「手は、肩幅で！」「最初は、逆手で！」「足は、鉄棒の真下で！」「足を

思い切って蹴り上げろ！」「手に力を入れろ！」「勢いをつけろ！」「やる気を出せ！」と、応援する。

磨実は「もうやだよ。いくらやってもできないよ」と、泣いた。

そのうちに、おじいちゃんが三脚を持って来た。

磨実は、三脚の下から三段目に足をかけて、その段を足で蹴って、鉄棒にからまり、逆上がりをやった。

次に、下から二段目に足をかけて……。

次に、下から一段目に足をかけて……。

一週間後、ついに三脚がなくても、地面を蹴って逆上がりができた。

「ヤッター！ ヤッター、バンバンザイ！ もう、これで一生困らないね。よかった」

それから、見てくれ、見てくれと、何度もやってみせてくれた。

できてしまえば、何のことはない。自分の頭より高い鉄棒でも、逆上がりが楽々できてしまう。

「手から血が出た。いたいよオ」

しばらくして、両手のまめがつぶれて血が出た。手に包帯をして、それでも逆上がりをやってみせた。

よほどうれしいのだろう。

その後は『足かけ逆上がり』『腕立て前転』など、何でもできるようになってしまった。

「お母さんは、逆上がりしかできない。磨実は、すごいね。よかったね」と言つてあげた。

磨実は片手をパツと開いて高く上げ、まめのできている方を見せて

「勝利の手！」

と叫んだ。

逆上がりにはコツがある。

以前、日本体育大学の先生が逆上がりのコツを教えていたのをテレビで

見たことがあった。鉄棒の反対側に補助の人が立って、両手指を前で組む。手の中に片足を乗せ、放り上げて、だんだん低くしてやる。逆上がりのフォームができる。誰でも逆上がりができるというものだった。どうしてもダメな時はやってやろうと思っていた。これは試さないで終わってしまった。

小学校に入学して、二週間後、

「逆上がりのテストがあった。もちろん、ボクは一回で楽々できた。よかった」

と磨実が喜んで帰って来た。

『クラスだより』には十数人の子が逆上がりができないと書いてあった。

近所の八百屋さんに磨実の話をすると八百屋さんは「ウチの娘も逆上がりができない」と言ったのに、「前半の、鉄棒にからまるところまではで

きるよ」と言う。そこまでできても、それから後、頭が下になって上がってこないと言うのだ。

磨実は後半は最初からできていたので、そんなことは考えてもみななかった。

私は、逆上がりができないのは、前半のからまるところができないのが問題だとばかり思っていた。

八百屋さんの子は太っているので、腹が邪魔になるのだと言う。

「オリンピックの柔道の山下は逆上がりができないと思うよ」と、おじさんが大胆なことを言う。

逆上がりができないのにもいろいろタイプがあるのだと思った。

逆上がりができないで困っている子、どう指導したらよいかわからないでいる先生は多いと思う。研究して発表したらすごいと思う。たかが逆上がりでも、できなければ暗い生活になってしまう。

それから、十年後、逆上がり補助機『さかあがり君』が新発売になった。

逆上がりは、多くの子どもの、悩みの種なのだろう。

(一九八七年四月記)



散 髪

プールが始まるというので、磨実の髪の毛を切った。

右の方が長いので、右の方を切って櫛でとかしてみると、今度は、左の方が長いので切る。後ろはもっと薄くと、やっているうちにどんどん短くなつた。

まだ、よくそろっていないのに、

「もういいよ。もうイヤだよ」と言う。

「夏に、髪の毛を長くしているのは、バカだ」

私はよけいにザクザク切った。ひどいところは、一、二センチのトラ刈りになった。

「こんなんじゃないあ、学校に行けないよ。男みたいでイヤだよ」

磨実は泣いた。そこに夫が帰って来た。

「なかなか似合うね。ボーイッシュだよ」

「ボーイッシュって何さ」

「男の子みたいってことだよ」

「男じゃあ、やだよォ」

「昔、ツイギーという、イギリスのファッションモデルがいて、その人は、ツイギーカットという、君のより短い髪型で、世界中の人が、ステキッて言っただよ。それに、髪の毛の長さとか、人間性は関係がない。髪の毛が短くなっても、君は、君だし」

「ニンゲンセイって何？ ツイギーなんて、知らないよ」

次の日は、おばあちゃんのカツラをかぶって学校に行くと言ったり、長く伸びるまで学校に行かないと言ったり、残った短い髪にリボンを縛りつけてみたり。結局、雨だったので、傘で頭が見えないようにして出かけた。学校から、しょんぼりして帰って来た。

「みんなが、『男、男』って言ったよ」

「磨実は女だってことを、知っているはずなのに、へんだね。みんなにいろいろ言われても、平気であるのだよ。しっかりした人間にならなければいけない」と励ました。

一番悪いのは私なのに。励ましても、何にもならなかった。軽くなった髪に分、私も磨実も重い心になってしまった。

夜、磨実の小学校の担任の先生から電話が入った。

「お手紙いただきました。朝見た時、どうしたのだろうとは思ったのです

が、僕は、ボーイッシュユでいいと思いますがね」と、言われた。

私は、夫の髪の毛をやはりジヨキジヨキ切って、トラ刈りにしてしまつたことがある。この時は、見られないほどひどかった。

「髪の毛は人間性とは、また別物です」と言い捨てて、夫は学校へ行つたものの、女生徒から、さんざん笑われたようだった。

後日、夫はこれにこりずに、また私に髪の毛を切るように言った。

「床屋に行く時間がもつたいない」と言う。

床屋に行くのが面倒なのだ。本当は、床屋が怖いんだ。

「あたり！」

今度は、あまり切らないということではじめた。

ゆっくりゆっくりやっていた私は、だんだんイライラしてきた。夫の髪は天然パーマがかかっている、堅くてザオザオしている。最後の最後に、耳の肉をチョンと切ってしまった。

「ごめんなさい。もうしません」

これで、ようやく床屋に行くようになった。

悠実も保育園の時に、私に髪を短く切られてワーワー泣いたことがあった。長い髪にリボンをつけたり、先生にとかしてもらいたかったのに。

「保育園の先生は、髪の毛をとかすためにいるのではない」と言っ、短く切った。

ある日、私が保育園に行くと、トイレの近くで男の子が泣いていた。見れば、パンツに、うんこをしてしまったのだ。

二人の先生は髪の毛の長い女の子の左右に一人ずつ座ってブラシをかけ、リボンをやり直してあげているところだった。保育園では、お昼寝があるので、当然リボンはくちやくちやになつてしまう。

私は、その男の子のパンツを脱がせ、うんこのお尻めがけて、ホースで水をかけた。

「今度から、気をつけるんだよ。またなつたら、自分でやるんだよ」と言つてビニール袋にパンツを入れて、持たせた。

その子に、着替えをさせてもどつて来ても、まだ女の子の長い髪の毛を、二人の先生がとかし続けていた。これでは、何か事故があつても、園児を助けられないだろう。

クラスには担任、副担任、主任の三人の先生に、生徒がたった十二人だった。

(一九八七年六月記)



帰りの会

「毎日帰りの会があるんだよ」

「何をするの？」

「今日よかったこととか、悪かったこととか言うの」

「よいことは、いいけれど、悪いことの方は、個人を攻撃するようなことは、言っではいけないと思うよ」

「帰りの会は、ズルズル長くなるから、いいことや、やなことがあっても言わないの。そうすると、すぐ終わるよ。遊ぶ時間がなくなるもの」

(一九八七年七月記)



アサガオ

「アサガオの絵なんて描けないよ」
と磨実。

一年生は、アサガオの観察が宿題で、最低二枚描いて出すことになっている。

「磨実は、絵は得意でしょ」

「アサガオは、むずかしいもの」

「キミコ方式で、成長の順に、下から上に向かって描いたら？」

「鉢も入れて、上から下まで、全部描かなければいけないんだよ。全部なんて描けないよ」

「紙がたりなかったら、どんどんたして、つなげたら？ 絵具の三原色

と白で、となりへとなりへと描いて行ったら？ ……ホラ、もう描けるでしよう？」

「紙はこの紙だし、クレヨンでないと、だめなもの」

「ともかく、外に行つて見て描きなさい」

「だれかついて行つてよ」

悠実がついて行つて、すぐにもどつて来た。

「ママちゃん、ぜんぜん描かないで遊んでいる。お父さん行つてよ」

それで、なんとか一枚目は描けた。

小さな画用紙に、上から下まで入れるのは、むずかしい。

しばらくして、花が咲いたので、

「花だけでもいいから描いてきなさい」

「描けないよ。むずかしいよ。花だけじゃだめなもの。全部描かないといけないんだ。葉が何枚。花がいくつ。つぼみがいくつって、わかるように」

「観察だから、花一つでもいいと思うよ」

「それなら、これでもいいのか？」

すぐに、みごとにアサガオを一つと、つほみを一つ描いてみせた。うまかつたので驚いた。

私は、「お母さんに描いてもらったんじゃないの」と、冗談を言いそうになった。それほどうまく描いた。

「描けるじゃないの？」

「これじゃだめだよ。もうやだよ」

それで、アサガオの観察は終わった。

アサガオの鉢を見に行くと、おばあちゃんが、アブラカスをやり、毎日水をかけていたため、葉は生い茂り、つるは棒からはみ出して、他の植木の方まで伸び、つほみと花が、ちよっぴりついていた。

花は、期待していた色水屋さんごっこにも、マニキュアにも使えない白だった。

これでは、大人だって、絵を描くのは無理だ。アサガオの観察をさせるのは、やめにした。早く気づいてやればよかったのと思った。

町田から、従姉妹の子が来た。磨実と同じ一年生だ。

「いいなあ、マミちゃん。私は、毎日アサガオの観察やらなくちゃあいけないの」

毎日お母さんが無理をさせていることになる。

「マミちゃん、アサガオの観察やらなくていいの？　ウチの子は、毎日やっているよ」

と、その子のお母さんが言った。

そのお母さんは、小学校の先生をしている。

私もそうだったように、子どもの気持ち、ぜんぜんわかっていない。

アサガオを観察して絵を描くことは、一年生にとって面白いだろうか？

夏休みが終わって、磨実は、やっと仕上げた二枚のアサガオの絵を提出した。

同じクラスの子で、毎日アサガオの観察をし、模造紙に大きく絵を描き直して、自由研究にした子もあった。

その子は、アサガオが大好きだったか？

毎日自分から世話をしたか？

楽しく絵を描き、記録したのだろうか？

学校からの課題を、楽しく進んで意欲的にするように仕向けるのは、指導方法のわからない親にとって、なかなかむずかしい。

親は、家庭でしかできない料理や、楽しい家族旅行だったら、いくらでも子どもたちにしてやれる。

(一九八七年八月記)



おつり

磨実が、魚屋から飛んで帰って来た。

「ボクが、おさしみを買ってお金をはらったら、魚屋のおじさんが、『ホイ！ 二百万円のおつりだよ』って言って、二十円くれたの。ボクが見て『二十円じゃあないの？』って言ったたら、『よく見てみい！ 二百万円だろう』って言うから、また、『二十円だい！』って言い返したら、そこにいたお婆さんたちが、ゲラゲラ笑ったの。ボクは、もうはずかしかかったよ」

「磨実は、魚屋のおじさんにからかわれたんだよ。磨実って、からかわれやすいんじゃないの？ 前にもプールの帰りに、目薬をさしながら歩いていたら、お祭りですよっばらったお兄さんたち五、六人に囲まれて、『お祭りが、まだ始まらねえのに、もう泣いているのか？』って、頭をなでられ

「たんだよね」

「ホント、ホント。ボクって、やだな。からかわれやすいんだもの」

(一九八七年八月記)



食事の支度

私と悠実が音楽会から帰ると、磨実が包帯で足をぐるぐる巻きにして、笑っていた。

「どうしたの？ まるで、ミイラじゃないの！」

「火傷したの」

「エッ！ 今日、土曜日だから、五時ごろお父さんが帰って来て、二人で外で食事をするはずだったでしょう？」

「そうなんだよ。その予定だったんだけど、生徒会の仕事が長引いて、帰ったのは八時近かったかな」

「それまで、曆実は、一人でいたの？」

「ウン。ボク腹がへって来たから、ご飯炊いて、豆腐の味噌汁作って、焼肉やるように、肉と野菜を刻んで、ご飯が炊けたからすぐに食べようとしてよそろうとしたら、おかまが冷蔵庫の上だから、椅子に乗っても中が見えなくて、おしゃもじから、ご飯がべっちゃり床に落ちて、椅子から下りようとしたら、それを踏んじやったの。熱かったよ」

「手当てをしたの？」

「ウン。だれもないから、水道の水をジャージャー出して冷やして、味噌を塗って、包帯したの」

味噌の壺は蓋が開けっ放しだし、薬箱はひっくり返っている。中からガ―ゼやら、カゼ薬が飛び出して、畳に散らかっている。かなり慌てたようだ。

「もう大丈夫なの？」

「ウン。もう平気サ」

「それで、食事は、どうしたの、お父さん？」

「磨実が作ったご飯と、味噌汁を食べて、焼肉をして、ああ！ 腹一杯だ。

ご飯も、うまく炊けていたよ」

「お米を研いで、ちゃんと手を入れて、測って、ここの所まで水を入れてやっただ」

足の裏は、少し赤くなっただけだったが、踏んだ時は、そうとう熱かったと思う。

磨実は、まだ一年生だ。お留守番ごころうさま。

(一九八七年九月記)



『お』のつく言葉

朝、磨実が起きて台所に来て言った。

「お母さん、お父さん、お兄さん、お姉さん、弟はみんな『お』がつくの
に、なぜ、妹だけ『お』がつかないんだろう。変だと思わない？」

「妹に『お』をつけてごらんよ。お妹になっちゃう。こりゃあ『おかしい』
ナンチャッテ。ウワツハツハ！」

「お父さん！ もっと、真面目に答えてあげたら？ 弟の『お』は、もと
もとの言葉で、その他ののは、敬語として『お』がつくとか何か、決まりが
あると思うのよ」

と私が言うのと、

「動物だって『お』がつくよ。おさる。おうま。おさかな……」

「『お』をつけると、変なものもあるよ。お犬。お猫。オペンギン。オカバなんて変だし、鳥なんかは、『お』をつけると、お鳥になっちゃう」

「それなら『お』を取ると、変なものもあるよ。音符なんか『お』を取って言ってごらんよ。言いにくいよ。んぷ、んぷ……」

「音楽もだよ。んがく、んがく……なんて汚いね」

「鬼は、ほんと、困るだろうね。に、に、に、なんて弱々しくなるね」

「雄鳥だって、んどり、んどり、なんて言われたら、やだだろうね」

「おしっことか、おならとか、汚い言葉には、『お』をつけるんじゃないかなあいの？」

「でも、うんこは、『お』がつかないよ」

「もうよそうよ。食事中なんだから。ホラ、ホラ、もう、出かける時間、七時だよ」

「日本語って、むずかしいね。外人さんが日本語を覚えるのって、たいへんだらうね」

みんな言いたい放題言って、学校に出かけて行った。朝の会話は、こんなふうに明るいのがいい。

(一九八七年九月記)



鬼のような母

エンピツキャップの交換が大流行している。

磨実の友達が、エンピツキャップをたくさん持って遊びに来た。磨実も、自分のキャップを出して並べたり、当てっこをしたりした。

「いいなあ。たくさん持っていて」

「ママちゃんは、買ってもらわないの？」

「少しは、買ってくれるけど。だめだって言うもの。鬼なんだよ」

「へー。鬼なのかア。あんなにやさしそうな顔をしているのにな」

私に聞こえているのに、二人は、そんなことを言いながら遊んでいる。

(一九八七年十月記)



川原の石

磨実が、学校から、石を袋いっぱい持って帰った。川原に、石を拾いに行く授業があったのだ。

「重たかった」

夜。その石を積んだりして遊んでいた。最後に一つずつハンカチに包み、それから、風呂敷に包んでしばった。

大荷物になった。

「もし、泥棒が、これを持って行って開いてみたら石で、がっかりだろうね」

と、にこにこして言う。

そして、また包みを開いて石を眺めながら言う。

「これ、めずらしいんだよ。キラキラした砂の入った石。こっちは、ピカピカの、ダイヤが入っているような石なんだよ。ボクの大事な宝物なんだよ。だれにもやらないよ」

どの石も、宝石になる子ども心を大切にしていきたい。

(一九八七年十月記)



カタカナのおけいこ

磨実の日記より。

国語のテストで、メの字を変に書いてバツだったので、お母さんが、「お父さんに、カタカナを見てもらいなさい！」と、言いました。

夕食後、お父さんのおひざに、だっこで、カタカナを書く練習をしてみました。

最初は、人の名前。マミ、ユミ、サユリ、ミカ、サトコ。

次は、動物の名前。ヨシクン、コロチャン、ニャンチャン。

それから、言っではいけない言葉。バカ、ドジ、マヌケ、アホ。

次は、言ってもよい言葉。カワイイ、ヨイコ、スキヨ、アイシテイルヨ、アリガトウ、ゴク로우サン。

「もっと、まじめにやったら」とお母さんが言いました。

「まじめだよ」とボクと、お父さんが言いました。

カタカナの勉強は、すぐに終わってしまいました。

おもしろかったので、またやりたいです。

(一九八七年九月記)



お父さんの仕事

磨実が、学校から帰って来て言った。

「今日は、社会の時間、一度も手があげられなくて、つまんなかった」

『家での、お父さんの仕事、お母さんの仕事について』の学習なのだ。

『お母さんの仕事』洗濯をする、ご飯のしたくをする、掃除をする……と、

いろいろあり、他のお母さんがしていないこと、文章を書く、ピアノを弾くもあつたので、磨実は得意だった。

みんなが出した『お母さんの仕事』の中には、「勉強の見直し」二十二人とというのがあつた。

学校では、宿題が出ないのだから、家でペーパードリルをやらせて、その見直しなのだろうか？

『お父さんの仕事』に、磨実は困った。

家に帰って来る時間は、決まっていない。九時ごろ帰る日は、食事をし、あとは子どもたちにお話をする。夜中の二時ごろまで、自分の勉強をする。日曜日は、クモの研究でいない。

いる日は、ワープロを打っているか、本を読んでいる。

『お父さんの仕事』について、二人で考えた。

「クモの研究をしている、というのは、どうかな？」

「それは、仕事じゃあないもの」

「高校の理科の先生というのは、どうかな？」

「それは、家での仕事じゃないもの」

ワープロは、クモの研究のためだし、本を読むのは仕事なのだが、そこまで理解できないだろう。

「お父さんは、家で何も仕事をしていないねえ」

「ウーン。エー。弱ったな」

家に『いる』というだけでも安心するし、素敵な『仕事』なのだけれど。

『みんなのお父さんの仕事』

草むしり。壊れた物を直す。自動車洗い。ペンキの塗りかえ。花の手入れ。お風呂そうじ。ガラス磨き。

ウチの場合、これは、おじいちゃんの仕事だ。

(一九八七年十一月記)



風邪をひかない方法

磨実が、お風呂で水をくみ、手で体にピチャピチャつけている。

「何しているの？」

「先生が、風邪をひかない方法を教えてくれたんだよ」

「どんなの？」

「あつたかいお風呂のあとに、冷たい水をかけるの。ザーッと、急に頭からかぶると、心臓に悪いからいけないのだけれど、心臓に遠い方から、手、足、お尻、肩、体と、少しずつ順にかけて行くんだって」

「すごいなあ。偉いことを教えてもらって、よかったね」

「水をかけると、いい気持ちだよ。お母さんもやってごらんよ」

学校で、いいことを教えてもらったね。

(一九八七年十一月記)



床屋さんにて

駅前の靴屋の二階に、新しい床屋ができた。

磨実がやってもらうと言うので、悠実と私がついて行った。床屋に行くのは初めてで、恐ろしかった。こわごわ中をのぞくと、二人の男性がやってもらっていて、もう一人、黄色の毛に、パンチパーマをかけた人が待っていた。

二人の床屋さんは、私が、

「この子をやってほしいのですが」

と言うと、店長らしい人だけが振り返り、

「いらつしやいませ。できますよ。どうぞ」

と言った。

待っていると、右側の方の人は、すぐに終わり、次に、パンチパーマの人がやつてもらった。左側の人もカットが終わったので、終わりかと思つたら、今度は、顔を剃り始めた。しばらくすると、それが終わったので、もう終わりかと思つたら、白髪染めを始めた。終わりそうで、なかなか終わらない。

磨実が、室内の看板を眺めて、

「『なを』というのは、『なお』って書くんだよ。あれは、ちがうよ」と言う。

看板には、『六十五歳以上の人は、証明があれば、半額になります。なを、証明する物がなければ、一般普通大人料金をいただきます』と、書か

れてあった。

左側にいた若い床屋さんは、白髪染めの人をそのままにして、磨実をやり始めた。その人は、口がきけないので、手まねで、前は、このくらいか？ とか、後ろは、どのくらい切るか？ と聞いた。

私は、大声で、手まねも入れて、

「前は、もっと短く」「後ろは、それくらいでいいです」と言った。

シャンプーは、ごしごしと荒つぽかったので、「マミちゃん。大丈夫かなあ」と、悠実と心配した。二回もシャンプーをして、顔も剃られそうになつたので、

「まだ、子どもだから、いいです」

と私が慌てて断って、やっと終わった。入ってから一時間もかかった。

「可愛く出来たね」

と悠実に言われて、

「そうだね。ボクもそう思う」

と磨実は喜んだ。

「口がきけなくても、あの若い床屋さんは、本当に腕がいいんだよ。あとからまた二人もやってもらいに来てたでしょう。同じ人間だから、普通につきあうことが大切なんだよ」

と私が言うと、

「それなら、一緒に働いていたもう一人の床屋さんは偉いね」

と磨実がしきりに感心している。磨実の散髪料は、八百八十円だった。

磨実が終わって出て来ても、白髪染めの人は、まだ、染め粉を塗られて、寝かされていた。

次の週の日曜日、やはり気になったので、その床屋さんに行った。

「先週、やっていただいた者ですが、娘の話聞いてやってください」

磨実が張り紙を指さして、

「『なを』は、『なお』です」

と言うと、

「そうなんですか？ すみません」

と床屋の店長は、小学一年生の磨実に謝った。

その日も、客が五人ぐらい待っていて、繁盛していた。年中無休の看板が出ていたので、どんな仕事もたいへんだなと思った。

(一九八七年十二月記)



ミイラ

磨実が小学校一年生の夏休み、

「お母さんは、大きくなったら何になりたいですか？」
と聞いた。

「ミイラになりたいです」

と答えた。

磨実は、すぐ図書館に行つて、ミイラについて調べて来た。

「エジプトのミイラと、日本のミイラと、どちらのミイラになりたいですか？」

ノートには、びつしりと、ミイラの造り方が書かれていた。しかも、1、2、3……と番号順のついた図まで描いてあった。

「エジプトのミイラになりたいです」

と答えると、詳しく説明をしてくれた。説明は、一時間近くかかった。

「おかあさんのミイラを見た人が、二千年前の子どもミイラって思ったら、いやだねえ」

と言つたりして、真剣に磨実の説明を聞いた。

この時、調べるために読んだエジプトの本が面白かったので、『ピラミッドの謎』『不思議な遺跡』などの本を読みふけるようになった。

そして『エジプトおたく』と言われるようになった。社会科の大好きな

大学生になった。世界の遺跡、遺産を旅したい夢もある。

親の一言は大切だ。時には、子どもの将来を決定づけてしまうこともある。

(一九九九年十月記)



トルコ カップドキア 池田磨実より葉書

残暑お見舞い申し上げます。

今は、まだカップドキアにいます。

(過ごしやすく、良い所なので、滞在を延ばしてしまいました。)

昨日は、皆既日食を見に、ここから6時間もかかる所に行って来ました。そのかいがあつて、本当に、スゴクキレイに見えました。月と日がかさな

った瞬間は夕方のようになりました。『ダイヤモンド・リング』も美しかったです。

帰る頃になったら、また何処かから電話します。元気だから、心配しないでください。

(していないかもしれないけれど……)

(一九九九年八月十日記)



トルコ大地震

(一九九九年八月十七日)

朝三時ごろ、イズミットを震源地としてマグニチュード七・八の地震がトルコ西部地帯を襲った。テレビではイズミット、イスタンブール、アダ

パサルの映像。日干しレンガのガレキの山。泣き叫ぶ人々。けがをした人々。死亡者は、五百人。

八時近くに事件を知った。磨実からは連絡がない。夜九時のニュースでは死亡者が八百人に……日本人の死亡者は報告されていない。旅行者の安否については、一言も触れないまま、イスタンブールのガレキの山が映つて、ニュースは、すぐに終わってしまった。磨実からの連絡がないままだ。

(八月十八日)

朝から心配をした。磨実からは、何も連絡がない。電話機の近くで、一日中待っているのに……。何も仕事ができない。食欲もない。なぜ連絡をしてくれないのだろう？

親として、できるかぎりのことをしよう。トルコの日本大使館にFAXを入れたとたんに磨実から電話が入った。

「ベルガマだよ。元気だから心配しないで。イスタンブールで大きな地震があったみたいね」

こちらの心配は、まったくわかっていない。電話は、すぐ切れた。元気だったので一安心だ。何人かの人から、磨実を心配して電話をもらっていたので、無事が確認できたことを連絡した。心配をしてくれる人が多いほど、心配がつのつた。夜十一時のニュースでは、死亡者が二千八百人になった。

(八月二十四日)

朝七時のニュースで、死者が一人を超えた。最終的には、四万人にもなるようだ。イスタンブールのガレキの下からは、まだ助け出される人が大勢いる。

帰国して、磨実の顔を見るまでは、やはり安心できない。

(八月二十五日)

連絡がない。テレビニュースでは、もう、トルコ地震関係の放送がなくなった。新聞も。私は食事ができなくなった。水を飲んだ。眠れなかつたので、頭がガンガンする。息ができない。だれも、磨実の安否を気にして

いる人がいないように思える。死んでいるかもしれないのに。

(八月二十六日)

朝七時、突然、電話が来た。

「お母さん、帰ったよ。成田空港だよ。元気だよ」

「みんなは？」

「みんな一緒だよ」

(八月二十七日)

磨実と十二時に東京駅で待ち合わせをして、山形新幹線で山形県立中央病院に行った。

夫の母親、おばあちゃんの病氣見舞いだ。

磨実が無事に帰国したことを喜んでもらった。

(九月二日・午前三時十八分、癌のため、永眠。池田貞子七十四歳)

「トルコ旅行の写真を、おばあちゃんに見せたかったね」と磨実が言った。